

COLLECTION

ベルンハルト・ヘトガー 《具象的コンポジション》

1921年/リトグラフ/ 37.5 × 30.7cm / 高知県立美術館蔵



街の歴史から読みとこう。コレクションからのイチオシ作品！

グリム童話の「ブレーメンの音楽隊」は、年老いた動物たちがミュージシャンとしてもう一花咲かそうと、大都市ブレーメンを目指すお話である。北海にそそぐヴェーザー川沿いに発展したブレーメンは国際貿易で繁栄した港湾都市で、その自由な気風は、古くから多くのアーティストたちを呼び寄せてきた。ブレーメンの北東に隣接する寒村ヴォルプスヴェーデには、1889年に有名な芸術家コロニーが形成され、パウラ・モーダーゾーン＝ベッカーやハインリヒ・フォーゲラーら、日本でも知られたアーティストたちが活動の拠点にしていた。彫刻家のベルンハルト・ヘトガーもそのひとりである。ヘトガーはパウラとはパリで親交を結んでいたようだ。彼がヴォルプスヴェーデに移住してきた時には、「美人薄命」のパウラは既にこの世になかった。ヘトガーはこの地でブレーメンの実業家ルートヴィヒ・ロゼリウスと知り合い、旧市街にあるベトヒャー通りの再開発の装飾を委託されることになる。ユーゲントシュティールとゴシック建築が融合したこの優美な通りは、現在でも街でいちばんの観光スポットだが、ナチ時代には「退廃美術」の烙印を押され、取り壊されそうになっていた。実はロゼリウスは筋金入りのナチ党員でもあり、裏から手をまわして破壊から通りを救ったとのこと。本当の金持ちは金の使い方を知っているということだ。今回の当館の収蔵品は、ヘトガーがまだベトヒャー通りの装飾の委託を受ける前に制作されたもので、当時の最先端のアーティストの作品を集めた《新ヨーロッパ版画集》の中の1点。ヴァイマルのパウハウスの版画工房で刷られている。具象的なイメージを組み合わせた、いかにも彫刻家らしい平面作品である。 文・奥野克仁(当館学芸課長)

INTERVIEW

浜田浄インタビュー

「浜田浄 めぐる 1975-」展を終えて

高知県立美術館での大規模個展を終えた浜田浄さんに、作品への思いや制作背景を振り返っていただきました。聞き手・塚本麻莉(当館主任学芸員)



浜田さんのアトリエにて

浜田浄 めぐる 1975-
2025年2月8日(土)~4月13日(日)
当館展示室B・C

—— 故郷・高知での個展を終えた今の気持ちをお聞かせください。
自分の故郷にある美術館で、約50年間の作品を展示できたことに、大きな意味を感じています。高知では現代美術に触れる機会が少ないなか、作品を見て「浜田はこういうことをやっているのか」と気づいてくれた方がいたら、それだけで展示した価値があったと思います。

—— 浜田さんの制作には、黒潮町の風景が深く関わっていると思います。
私は黒潮町の入野で生まれ、海を日常的に見て育ちました。同じ海でも、朝昼晩で全く異なる姿を見せます。その変化にいつも刺激を受けてきました。作品には直接風景が描かれていませんが、見えないところで、風景の印象を投影しています。水平線の向こう側を見つめていると、今という時間が見えてくる気がします。(黒潮町は)風光明媚な土地ですが、私を感じ取って作品に込めているのは、目に見える景色ではなく、その奥に漂う目に見えないものです。

—— 初期の版画作品からずっと、水平線がキーワードとなっていますね。
水平線というモチーフは常に重要ですが、そこから何を感じるかは見る人それぞれ違います。単に景色を楽しむだけではなく、そこからさらに何かを感じ取り、新しい感性を見つけてもらいたい。それが私の願いです。

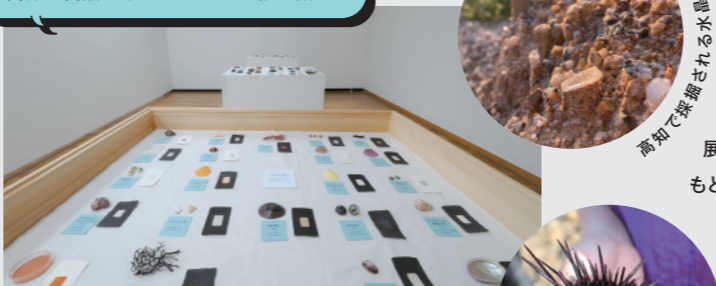
—— 浜田さんご自身が「良い作品」と感じるのは、どのような作品でしょうか？
難しい質問ですが、やはり1980年代に制作した鉛筆のドロ잉作品ですね。当時からこぞできた作品で、多くのエネルギーと時間が必要でした。あの時期の作品があったからこそ、今があると感じています。

—— 最後に展覧会を訪れた方々へのメッセージをお願いします。
「なぜこんなことをやっているのか?」と気づき、疑問を持つことが重要です。その疑問こそが、作品への関心や理解の出発点になると思います。

1 高知サマープロジェクト2024 Color Lab 色の実験室

2024年7月8日(月)~9月14日(土) | 当館展示室D

高知の自然の恵みが生んだ色彩の数々。



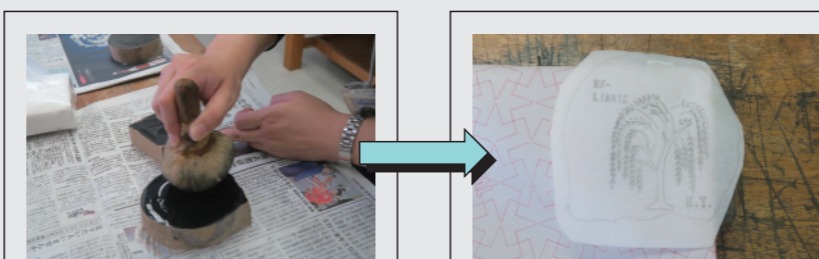
越智明美《Dialogue of the Earth》より「高知の海色」の展示風景
撮影：中島健蔵

様々な自然素材を用いた
手作り絵具は
それぞれ小さな瓶に
入れて展示しました



今回のサマープロジェクトでは、高知を拠点に活動する作家の越智明美さんをコーディネーターとし、日本画の絵具と自然のつながりを探求する展示&ワークショップを実施しました。伝統的に鉱物や貝殻など自然の素材を原料としている日本画の絵具(岩絵具)。図工や美術の授業では触れる機会がないこの画材の面白さを広く伝えたいという思いから、今回の企画を立ち上げました。展示では日本画のオーソドックスな絵具を紹介することに加えて、もともと越智さんが高知大学の大学院で研究していた珊瑚末や、大月町の海洋研究者・中地シュウさんの協力を得て開発を進めていたウニの棘の絵具、館内常設作品・若林寛《石枕》にも使用されている石材として当館と馴染みが深い大理石「土佐桜」を使った絵具など、高知の自然素材を使用した新しい絵具を紹介。さらには既存の枠にとらわれずにあらゆるものを粉砕して作った絵具の色見本と素材を並列展示する作品《Dialogue of the Earth》を展示しました。展覧会期中は来場者が土佐桜を手にとって削り絵具を作れるコーナーや、手作り絵具の色見本を顕微鏡で見られるコーナーなども設け、夏休みの期間に来館した親子連れで賑わいました。 文・中谷有里(当館主任学芸員)

2 日和崎尊夫展 関連ワークショップ「木口木版画教室」



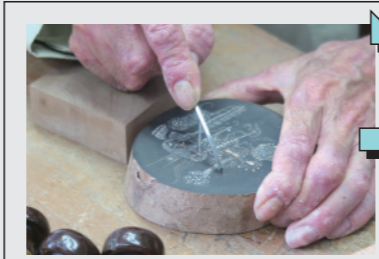
1 板の下準備

彫った部分が見えるよう、木口板に墨をぬって黒くしたあと、ヤスリとティッシュで磨き、表面をツルツルにします。



2 下描き

トレーシングペーパーとカーボン紙を使って版木に下描きを描きます。摺ると反転してしまうため注意!



3 彫る

ビュランは手のひらでグリップ部分を包み込むように握り、人差し指を刃の上に添えるように持ちます。手前から向こうに力を入れずに走らせ、曲線はビュランではなく版木を動かします。板目木版の彫刻刀とはまったく使い方が違い、慣れるまで一苦勞です。



4 摺る

インクをローラーで版に付け、和紙を置いてパレンで摺ります。予想以上の力が必要だったり、インクのりが均一じゃないと綺麗に摺れなかったりと、難しい! 和紙は薄くて肌理の細かい雁皮紙を使いました。

木口木版画家として独自の世界を創り出した日和崎尊夫(1941-92 / 高知市生まれ)。その回顧展のワークショップとして木口木版画教室を実施しました。講師は生前の日和崎とも交流のあった徳廣秀光さん。日和崎とのエピソードも交えながら、版の彫り方、摺り方を教えていただきました。固い木口板にビュランと呼ばれる彫刻刀で版を刻む工程は想像以上に難しく、全員が悪戦苦闘。作品が完成した時は達成感に満たされました。実際に制作を経験してから日和崎作品を見ると、改めてそのすごさに圧倒されました。 文・柳澤宏実(当館学芸員)

版画家 徳廣秀光さん

コレクション・テーマ展
日和崎尊夫 私の手の中に宇宙がある
2024年10月24日(木)~12月8日(日)
当館展示室D
木版画教室：11月10日(日)、17日(日)、24日(日)
13:00~16:00 全3回

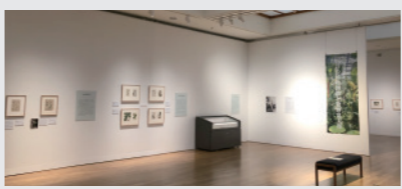
5 完成



4 英国王室に咲く ボタニカルアートとウェッジウッド — 植物画のおいたち —

2025年4月24日(木)~6月29日(日) | 当館展示室B・C

植物画はもとより、ウェッジウッドの陶磁器が人気でしたが、基本的に食器類はガラスケースの中、ところが、会場の一角に再現したヴィクトリア朝時代の小部屋のテーブルの上にお茶碗が露出展示されていたのをお気づきでしたか? 文・奥野克仁(当館学芸課長)



3 生誕200年 河田小龍展

— 激動期への眼差し —

2024年11月9日(土)~2025年1月5日(日) | 当館展示室B・C

幕末明治期の土佐を代表する画家・河田小龍(1824-1898)の生誕200周年を記念して、当館、高知県立坂本龍馬記念館、歴史民俗資料館で3館連携展を実施しました。2003年に当館で実施した河田小龍展から実に20年越しの大規模個展です。小龍は画家としては狩野派をはじめ多彩な様式を使いこなし、明治10年代には高知でもっとも優れた画人と目されていました。一方で坂本龍馬やジョン万次郎との関係でも知られる幕末の知識人でもあり、土佐の人々にとっては調度品や絵馬、幟などを通じて生活空間にもっとも浸透した絵師のひとりでした。この捉えどころのない人物を、3つの専門分野の視点から検証し捉えなおそうとしたのが今回の企画です。当館では画家としての小龍に真正面から取り組み、これまで曖昧だった作品の編年順の整理を行いました。各方面の所蔵家の皆様のおかげにより、安政年間に浦戸湾に迷い込んだ異国船の取り調べ記録『江南応接帖』や、小龍の肖像写真など、絵画史以外の分野の方にもアピールしそうな新出資料を多数掘り起こすこともできました。展示は終わっても研究に終わりはありません。次の目標は小龍が晩年10年間、ほぼ毎日書き記した『小龍日記』の全文翻刻をふくむ資料集の作成。在職中に完了できると良いけれど。 文・中谷有里(当館主任学芸員)

描いて描いて描きまくった人生じゃった……

柴田ケイコさんに描き下ろしていただいた「しよりりようさん」も大活躍。

©柴田ケイコ

新聞資料やスケッチなども展示

NEWS

当館発! 学芸員渾身の図録等が続々刊行! ミュージアムショップにて販売中。

2024-25年度は、当館企画展やコレクションに関連した出版物が相次ぎました。その見どころをご紹介します。



「生誕200年 河田小龍 — 激動期への眼差し」展覧会図録

幕末明治期の土佐を代表する絵師、河田小龍の多彩な画業を一冊に。最新研究を追える論考やコラム、落款印章集も収録。
3,960円(税込) | 160ページ | デザイン: 重実生哉



「ARTIST FOCUS #05 三嶽伊紗カゲ ヲウツス」ドキュメントカタログ

作品図版や論考、作家の言葉を収録。展示会場の繊細な空気感をそのまま落とし込んだようなデザインにも注目。
1,500円(税込) | 48ページ | デザイン: 西岡勉



「浜田浄 めぐる 1975-」展覧会図録

出品作品やそのディテール、摺り下ろしの展示風景を収めたドキュメントカタログ。学芸員による論考などテキストページも充実しています。日英バイリンガル版。
4,400円(税込) | 156ページ | デザイン: 阿部航太



高知サマープロジェクト2024 「Color Lab 色の実験室」報告書

2024年夏の教育普及企画「Color Lab 色の実験室」の報告書。素材と手作り絵具の色見本一覧をカラフルなポスター形式でお届け。関連イベントの記録も充実しています。
700円(税込) | B2ポスター(両面) デザイン: 竹村直也



Yasuhiro Ishimoto — Lines and Bodies

2024年パリで開催された石元泰博展の図録。重厚なモノクロ印刷や折ページなど、こだわりと遊び心溢れる一冊。掲載図版は全点当館所蔵の石元作品。
13,750円(税込) | 216ページ
発行: Le Bal/Atelier EXB ※英文版のみ、取扱い部数限定



館蔵品目録(11) 石元泰博コレクション(2) 石元泰博・コレクション展2014-2023

今まで開催してきたコレクション展のパンフレットを合本し、全出品作のリストを統合。写真集として楽しむもよし、研究資料集として熟読するもよしな大ボリュームのレゾネです。
6,600円(税込) | 2巻組(206ページ・204ページ) デザイン: 山根綾子

マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ 『CARCAÇA (カルカサ)』

エネルギッシュな身体表現と歌唱、そして力強いドラムの生演奏とエレクトロニクスのビートによって、舞台上も客席の魂も大きく揺さぶった、マルコ・ダ・シウヴァ・フェレイラ振付「カルカサ」。観客の方からは「想像を超えた体験、だった」という声も寄せられました。それは、この作品が舞台上だけで完結するのではなく、身体表現を通して、その背後にあるポルトガルの歴史や社会までもを、観る者に読み解かせたからではないでしょうか。

都市の若者が親しむクラブやストリートカルチャーから生まれたダンスの奥には、独裁政権下で存亡の危機にあったフオークロアと、現代社会で個々のアイデンティティを解放する難しさ、そしてフェレイラが注視する「文化の形態化」がはらむ危うさが複雑に絡み合っていました。ポルトガル語で「骨格」や「骸骨」を意味する「CARCAÇA」はその象徴。記憶の奥底を揺さぶる、言葉を超えた問いかけがそこにありました。文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)



Photo: Taisuke Tsurui

2024年11月20日(水) 美術館ホール

Museum Hall Report



仁科貴さん(右)

高知が生んだ稀代のバイプレイヤー。その魅力とは？

殺され役3000回以上と言われた高知ゆかりの俳優・川谷拓三が亡くなって、早くも30年が経ちました。上映会初日は『義なき戦い』シリーズを中心に上映し、なかでも『仁義なき戦い』広島死闘篇は、今回ゲストトークにご登壇いただいたご息子の俳優・仁科貴さんからのリクエストで。まだまだチョイ役だった川谷が、ロープでポットに繋がれ、引っぱられて死んでいくチェビラを演じて、大きな評判を呼んだ作品です。2日目は初主演作『史上最大のヒモ・濡れた砂丘』を含む代表作を上映しました。この作品は、通称「500万円ポルノ」と呼ばれた低予算作。そういう作品に呼びがかかるのも川谷らしいと思います。

仁科さんのトークでは、子どもの頃は映画を観ることが大好きで、とにかく映画を観ていたことなど幼少の頃のお話に始まり、川谷さんとの親子ならではのエピソードが次から次へと飛び出し、こだけの話や裏話を語られました。ホワイエでは、仁科さんのサイン会が開催されたほか、当館の映画関連資料がまとまった「星加コレクション」から、川谷拓三出演作品の台本やチラシ、そして高知での舞台挨拶の貴重な写真などを展示しました。また、過去に没後記念上映会を開催した安田町の大心劇場からも、『仁義なき戦い』にちなみ手首を切り落とされた迫力のあるフィギュア、サイン入り法被のぼりまで披露され、川谷拓三の魅力に満ちた空間と、ファンと記念撮影に応じるなど気さくな仁科さんの人柄に、多くの人が魅了されていました。文・浜口真吾(当館企画事業課主幹)



サイン会には多くの方が詰めかけました



ホワイエでは資料展示も

Museum Hall Report

1927『ROOTS』日本初演

演劇×アニメ。創作のヒミツを体験！



当館のインスタグラムで当日の様子を公開中！

2025年1月17日(金)～19日(日) 美術館ホール
ワークショップ：1月15日(水) 龍馬学園、18日(土) 美術館

イギリスの劇団1927による『ROOTS』の日本初演に先駆け、劇団の真骨頂である〈演劇とアニメーションの融合〉を体験できるワークショップを開催しました。講師は1927の全アニメーションを手がけるポール・パリット。15日は龍馬学園のグラフィックデザイン専攻の学生、18日は小学生から大人までの幅広い参加者が集いました。まず初めに、アニメーションの素材となるイラストを描き、それをスクリーンで映像に取り込み、続いて、演じるための〈モノマスケ〉を制作。学生の皆さんが次々と生み出す大胆な色彩やキャラクターたちにポールも感服していました。子どもたちには5年前の「マテリアル・ミュージアム」で収集された地域の端材・廃材を使ったマスケづくりが好評でした。最後は、「高知島に住む子猫キティが魔女や森の(ケモノ)たちと出会う」という1927らしい愛らしくもダークな小さな物語が完成し、マスケを被った参加者とアニメーションが共演しました。未経験者もマスケを被っただけで自然に〈演じる〉ことができたり、イラストがアニメーションに変わる瞬間には歓声が上がったりと充実したひと時でした。そして迎えた『ROOTS』公演では、各章で異なるアニメーションの表現や、珍しい楽器が奏でる音色、それらとシンクロする俳優の絶妙な演技が融合した欧州の珍しい10の寓話や昔話が、圧倒的な臨場感をもって舞台上に立ち上がりました。ちなみに人気を集めた物語は〈太った猫と家族にまつわるヘルツのほなし。1927が願ったように、観客の皆さんに一つでも心に残る物語が届いたなら嬉しく思います。文・松本千鶴(当館企画事業課主幹)

Museum Hall Report

波にまつわるパフォーマンス、という触れ込みで実施した『the storm』。11月3日の美術館開館記念日に登場したパフォーマンスグループ contact Gonzo が、建築家集団の dot architects と共に劇場版初演に臨んだ、舞台の枠組みを打ち破る実験的公演です。桂浜でのリサーチを経て実施された公演は、トークとパフォーマンスの2部構成で開催しました。前半の人類学者の松嶋健氏と出演者のトークでは、作品の成り立ちから自然と人間の関係性まで幅広い話題について触れ、鑑賞への道標を立てました。後半は、打ち寄せては引いていく波を表現する、究極にシンプルで実験的なパフォーマンス。ワークショップに参加した20～70代の6名も加わり、舞台上に波を起こします。お客様には場所を移動しながら寝転んだり立ち上がったりの思い思いのスタイルで鑑賞していただきました。最後はお客様も参加して「さばーん！シユワシユワ！」



Photo: 井上嘉和

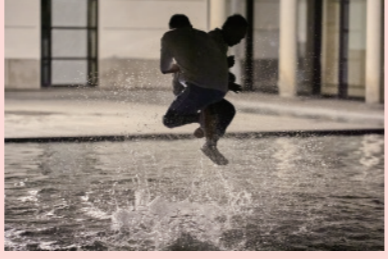


Photo: Taisuke Tsurui

と大波小波をみんなで作り、高知らしく高らかに終了しました。なお、本作品は7月にベトナムで地元参加者19名と共に『the storm / gonzo』として上演されました。高知で生まれた作品が半年も経たず海外で再演され、嬉しい限りです。文・福島尚子(当館企画事業課主幹)

普段は静まり返る19:00の美術館。2024年11月3日は、中庭の池で「嵐前夜の水バシャバシャ! 荒木優光とコンタクト・ゴンゾの中庭サウンドカーニバル」と題し、パフォーマンスを実施しました。ハードな身体接触を持ち味とする contact Gonzo が、散水ホースやドライアイスを使い、中庭の池を縦横無尽に遊びつくす試みです。夜の美術館に集まった100名余りのお客様には、パフォーマンス後に、普段は入れない中庭からの眺めもお楽しみいただきました。

contact Gonzo Meets KOCHI 2024-2025

contact Gonzo × dot architects' the storm



Photo: 井上嘉和

2025年2月22日(土) 美術館ホール

館長寄稿

日々のつがやき

定期上映会拾遺



小田香さん(右)とのトークの様子

昨秋の定期上映会「小田香とタル・ペーラ」では、小田香監督が高知までお越しいただきトークイベントを開催した。全作品上映を謳い文句とした上映会だったが、その後も小田監督は新作を発表、精力的に活躍を続けている。今年3月、『鉦 ARAGANE』『セノータ』に続く「地下世界三部作」の最終章『Underground アンダーグラウンド』の全国上映が始まったほか、2-3月には東京都写真美術館での展示という形で新作《母との記録「働く手」》が公開された(「恵比寿映像祭2025」の一部)。今年度の話題に移って、春の定期上映会はフランスの監督ジャン＝ピエール・メルヴィル(1917-73)の特集した。初期には『海の沈黙』『恐るべき子供たち』といった文芸映画で注目され、その作風はヌーヴェル・ヴァーグの監督たちに強い影響を与えた。中期から後期は『いぬ』『ギャング』など犯罪映画＝フレンチ・フィルム・ノワール路線で足跡を残し、最もポピュラーなのは人気絶頂期のアラン・ドロンを主演にした3作、『サムライ』『仁義』『リスボン特急』あたりだろうか。中でも『サムライ』は最も引き締まって研ぎ澄まされた作品で、寡黙で孤独な殺し屋を演じるドロンの魅力が素晴らしい。なお冒頭の字幕＝サムライ(侍)の孤独を語るエピソード(書物の引用)は、実はメルヴィル自身の作文である。一方『仁義』と『リスボン特急』になるとドロンよりも共演者の印象が強い。前者では同じフランスのスター、イヴ・モンタンであり、後者ではハリウッドから招いたリチャード・クレンナである。クレンナは一般的にシルヴェスター・スタローンの上官を演じた『ランボー』シリーズで知られるが、むしろ『リスボン特急』やオードリー・ヘプバーン主演の『暗くなるまで待って』で演じた陰影のある犯罪者役に存在感を発揮している。フィルム・ノワール(＝暗黒映画)はフランス語だが、もともとはハリウッド製犯罪映画(特に1940-50年代の)を指してフランスの批評家が言い出し、それをアメリカの映画人も踏襲したというからややこしい。そういった作品群やアメリカのハードボイルド小説に影響されてフランスでもこの種の犯罪映画が作られるようになり、フレンチ・フィルム・ノワール(英語なのかフランス語なのか…)などと呼ばれたため、なおのことややこしい。個人的にはフランス映画よりアメリカ映画をよく見る方だったので、ジョン・ヒューストンやドン・シーゲル、サミュエル・フラーといった監督の犯罪映画には一時期熱中した。スタンリー・キューブリックの初期作品『現金に体を張れ』もまさにフィルム・ノワールの逸品である。その延長でメルヴィルの作品も見られるようになり、ハリウッド映画とはまた肌合いの異なる独自の作風には強く惹かれたものである。文・安田篤生(当館館長)

美術館のなかのひと

第5回

美術館ではどんな人が働いているの？職員やそのお仕事を紹介しします。

Q どんなお仕事をしていますか？

美術館にあるカフェで働いています。お客さまが芸術にふれたあと、その余韻を楽しむことができるような、素敵な空間と店づくりを目指して、日々頑張っています！

Q 仕事で印象的だった出来事は？

1927『ROOTS』の公演では、かなりディープなダークさにちょっと驚かされた面もありつつ、日常とは違う演劇×アニメーションの世界に誘われ、ライブ音楽でさらに引き込まれました。マルクにて打ち上げをしていただいた際、出演者・スタッフの皆さんにお会いでき、感動を伝えることができました。

Q 美術館のここがオススメ！

店をですとすぐ目に入る館内作品、若林富の《石杖》。仕事柄、帰る時間がまちまちなので、毎日違う景色を見せてくれる本作品に、1日の疲れを癒されながら家路へと向かいます。美術館にはそんな場所がたくさんあります。展示はもちろん、ぜひそんなお気に入りの場所を見つけに来てほしいです。

聞き手・茂木恵美子(当館主任学芸員)



閉館後に見える《石杖》越しの夕陽



山中店長(中央)とスタッフのみなさん



人気の定番メニューは「マルクランチ」